

## 高齢者施設における伴侶動物との共生のための支援内容項目の検討

### —デルファイ法を用いた調査—

田島明子<sup>1)\*</sup>・安藤孝敏<sup>2)</sup>・押野修司<sup>3)</sup>・安野舞子<sup>4)</sup>

- 1) 医療創生大学
- 2) ヤマザキ動物看護大学
- 3) 埼玉県立大学
- 4) 横浜国立大学

## Support Items for Incorporating Companion Animals into a Care Home for Older People: A Survey Using the Delphi Method

TAJIMA Akiko<sup>1)\*</sup>, ANDO Takatoshi<sup>2)</sup>, OSHINO Shuji<sup>3)</sup>, YASUNO Maiko<sup>4)</sup>

- 1) Iryo Sosei University
- 2) Yamazaki University of Animal Health Technology
- 3) Saitama Prefectural University
- 4) Yokohama National University

### 1. 目的

高齢期において自立した生活が困難になる中で、多くの高齢者が生活場所の移行や画一的な共同生活を経験する。誰でも晩年に幸せな時間を過ごすことを願うものであろう。その実現のために高齢者施設において意味や価値のある重要な作業の実現（作業権の保障）が目指される必要がある。2023年度の本学会において、伴侶動物（Companion Animal：以下、CA）との共生可能なユニットを設置し、10年が経過したA介護老人福祉施設のケアスタッフを対象として個別インタビュー調査を行い、CAとの共生を高齢者施設で実現するための体系的な支援内容を明らかにした。本研究では、その結果に基づき、専門家集団の合意形成を得ることを意図した複数段階の調査手法であるデルファイ法にて得られた知見の内容的妥当性を高め、高齢者施設でのCAとの共生に際して役立ち得る支援内容項目に収斂させることを目的とした。本発表では、高齢者施設におけるCAとの共生のための支援方法に関する自記式質問紙調査票を作成し、A介護老人福祉施設の動物共生ユニットに勤務するケアスタッフを対象にデルファイ法を実施した結果、内容的妥当性が高められた支援内容項目について報告する。

### 2. 方法

**対象者：**A介護老人福祉施設において動物（犬・猫）との共生を行うユニットに勤務するケアスタッフで、個別インタビュー調査を実施した4名、デルファイ法による調査の実施にあたり同意を得られた31名（非常勤勤務者やパートタイム勤務者含む）であった。

**方法：**個別インタビュー調査【調査時期 2023年2～3月】4名のケアスタッフに実施した個別インタビュー調査結果のSCATによる第3段階（データを説明するようなテキスト外の概念の生成）の分析結果に基づき、自記式質問紙調査票第1版とした。10項目、56の質問から構成され、5段階のリッカートスケールにて回答を求めた。調査票は無記名とした。デルファイ法を用いた自記式質問紙調査（2回）【第1回：調査時期 2024年5～6月、第2回：調査時期 2024年9～10月】デルファイ法の調査回数は、インタビュー調査結果に基づいた調査票作成の過程を含めて3回の実施とした。第2回質問紙調査では、第1版の「非常にそう考える」「そう考える」の合計が80%未満の項目について除外をした自記式質問紙調査票第2版を作成し、第2回の調査を実施した。調査票は郵送にて送付、配布と回収は施設が行い、回収された調査票は、筆頭筆者が施設から直接受け取っ

\* 連絡先：tajima.akiko@isu.ac.jp

た。

**倫理的配慮**：筆頭筆者の所属機関における倫理審査委員会から承認を得た後に実施した(承認番号：医大研倫第23-034号)。

### 3. 結果

#### 1) 対象者の基本情報

対象者の特徴として、女性が多く、年齢は40代以上が多かった。介護職経験年数の平均値は、11.5年、中央値は9.5年であったが、犬・猫ユニットの経験年数は、その3分の1程度であり、犬ユニットが平均値4年、中央値が3年、猫ユニットが平均値6.5年、中央値6.5年であった。

#### 2) 自記式質問紙調査票第1版

支援内容項目については、1. 集団性が活かされた伴侶動物と人の幸せな共生のかたちの実現(4質問)、2. 他機関・地域の人との協力・連携(7質問)、3. 個別性を重視した動物の健康維持のための生活マネジメント(6質問)、4. ケアスタッフ間での細やかな情報共有と統一的なケア実践(6質問)、5. 動物のストレス軽減のための実践(8質問)、6. 人と動物の交流機会の重視(7質問)、7. 人と動物へのリスク管理の視点(7質問)、8. 規則的な動物の生活ケア(5質問)、9. 動物の看取り実践と死に直面した際の感情の受け止め(4質問)、10. ケアスタッフ間で動物のケアを学び合う機会づくり(2質問)、の10項目、56の質問を示した。

#### 3) 自記式質問紙調査票第2版

第1回質問紙調査で同意率80%以上であった49項目からなる自記式質問紙調査票第2版を作成し、第2回目の質問紙調査を実施したところ、1項目のみが同意率80%未満となった。支援内容項目の87.8%が

90%以上の合意率であり、より内容的妥当性の担保された支援内容項目となった。支援内容項目や調査結果については学会当日提示する。

### 4. 考察

個別インタビュー調査と2回の自記式質問紙調査からなる3段階のデルファイ法の調査により、対象者の80%以上が合意した高齢者施設における伴侶動物との共生のための動物(犬・猫)との共生に向けた支援内容48項目について内容的妥当性が確認された。構成概念や構造的側面、一般化可能性の点から、考察する。1点目は、第1回・第2回の調査結果から動物(犬・猫)との共生を行うユニットでの勤務経験の長さやマネジメント役割の有無により、回答に差異がある様子が窺われた点である。デルファイ法は研究対象者の熟達化した経験則が重視される研究方法であり、本研究において該当ユニットでの勤務年数が比較的短い対象者の回答を含めた研究結果であった可能性は否定できないと考える。2点目は、「1-② 施設内において皆で動物との別れの儀式をする」および「6-⑥ 入居者・ケアスタッフが動物の看取りをともに行う」に対して、「入居者は希望者のみで良い」との意見が寄せられた点である。どちらも90%以上の高い同意率が得られていたが、自由回答の意見を参考にしつつ表現の変更(例えば「入居者は希望者のみ」の文章を挿入する)も一考に値すると考えた。今後は多様な支援体制についても研究を展開し、より一般性を備えた支援内容項目の生成が必要と考える。

### 5. 利益相反

本研究に関して開示すべき利益相反はない。